

# 後藤新平による少年団運動への関わり

圓 入 智 仁

## How did Shinpei Goto Take Part in the Boy Scouts?

Tomohito Ennyu

(2018年11月22日受理)

### はじめに

本稿の目的は、少年団日本連盟の初代総裁（後に総長）の任にあった後藤新平が、少年団活動に参加した経緯と、後藤が少年団員である子どもたちとの関係をどう捉えていたのかを解明することである。満鉄総裁や閣僚、東京市長などを歴任した後藤が、晩年、少年団活動に没頭したことは、多くの先行研究が指摘するとおりである。しかし、なぜ、後藤が少年団に関わったのかについては、関心が払われてこなかった。このテーマは、後藤と少年団、あるいは少年団の性格そのものを考える上で、極めて重要なものであると考える。

少年団に関する先行研究によると、子どもを対象とした社会教育である少年団には、20世紀初頭に英国で始まったボーイスカウトの影響を受けたものと、日本独自の活動を展開するものがあった<sup>1)</sup>。両者は共に「少年団」を名乗り、その多くが、1922（大正11）年に発足した少年団日本連盟に参加した。ただ、後者については、1932（昭和7）年の文部大臣訓令「児童生徒に対する校外生活指導に関する件」の後、多くが連盟を離脱し、国家主導の少年団組織である帝国少年団協会（1935年発足）に参加した。さらに1941（昭和16）年、男女青少年団の統一組織の発足により、連盟（1935年、「大日本少年団連盟」に改称）は解散した。ボーイスカウトの影響を受けた少年団は、「宣誓」と「おきて」の制定、知識や技術に基づく「進級」と「技能章」の制度、異年齢少人数集団による「班」制度、キャンプなど野外活動の方法論などを採用していた。これらは、現在まで世界中のボーイスカウトに共通する特徴である。

### 1. 先行研究の検討

後藤新平と少年団との関係については、1990年代初頭に中島純が、「少年団日本連盟と『健児教育』—1920年代における実態と動向—」と、「大正デモクラシー期後藤新平の社会教育思想」において論じている<sup>2)</sup>。前者で中島は、後藤が「国家官僚の立場から、この時期全国的に広がりを見せていた少年団に『権力の論理』をもって働きかけた最初の人物」とし、後者では後藤が「少年団事業を起こし、公民的基礎を養成する訓練施設とそれを位置付けた」ことを、「『挙国一致』＝『国民内閣』政治の実現を目指す『政治の倫理化』運動の一環にほかならなかった」と述べている。

これら中島による一連の研究とほぼ時を同じくして、少年団の歴史研究が進んだ。その成果は、上平泰博・田中治彦・中島純『少年団の歴史』（萌文社、1996年）や、田中治彦『少年団運動の成立と展開』（九州大学出版会、1999年）としてまとまった。前者において中島は、後藤には少年団に強い思い入れがあったことを指摘しながらも、やはり、自らの研究を反映させた文章を執筆している。また後者において田中は、後藤の少年団日本連盟総裁就任や、後藤が実施した少年団に関する全国巡回講演について言及しているが、それぞれ事実の確認が中心であった<sup>3)</sup>。

その他にも、後藤が「晩年にボーイスカウト運動に没頭した」ことは<sup>4)</sup>、様々な後藤新平の研究や伝記が指摘しているが、後藤が少年団に関わった背景については、「彼（後藤—引用者）年来の主張である『自治』精神を次世代に培養するための最適の場と考えたからであろう」や、「後藤は、未来を担う少年たちが、健全なナショナリズムを育みながら、日本国民としての自覚を涵養する理想の場を、少年団に見いだしたのでであろう」という指摘がみられる程度である<sup>5)</sup>。

## 2. 後藤新平の経歴<sup>6)</sup>

後藤新平は1857（安政4）年6月、陸奥国胆沢郡鹽竈村（現在の岩手県奥州市水沢区）に、留守家の家臣の家の長男として誕生した。後藤は藩校などで学んだ後、福島の須賀川医学校、愛知県病院の三等医、大阪陸軍臨時病院、名古屋鎮台病院などを経て、愛知県医学校長兼病院長に就任し、内務省衛生局に入った。その後、1892（明治25）年に内務省衛生局長に就任した。

1898（明治31）年に台湾総督府民政局長、1903（明治36）年に貴族院勅選議員となり、1906（明治39）年から1908（明治41）年まで南満州鉄道総裁を務めた。その後は第2次桂太郎内閣の通信大臣と鉄道院総裁、拓殖局総裁を務めた。第2次桂内閣総辞職後はロシア外交に関わった。1912（明治45）年末発足の第3次桂内閣でも同じ職務に就いた。1916（大正5）年発足の寺内正毅内閣で内務大臣（1918年、外務大臣）と鉄道院総裁を務めた。1918（大正7）年に寺内内閣が総辞職すると、1920（大正9）年12月には東京市長となった。

1922（大正11）年、後藤は「少年団日本ジャンボリー」の総裁、東京連合少年団の団長、少年団日本連盟の総裁（1924年からは総長）に就任した。これ以降、後藤は終生、少年団運動に関わることになる<sup>7)</sup>。

1923（大正12）年に東京市長を辞した後、同年に発足した山本権兵衛内閣で、内務大臣と帝都復興院総裁を務めたが、同年末に山本内閣は総辞職した。1929（昭和4）年4月、3回目の脳溢血を発病し、13日に71歳で死去した。

## 3. 後藤と少年団の出会い

後藤新平が青少年教育に関わる原点は、1907（明治40）年4月、万国学生キリスト教青年大会に参加した諸外国代表者に対して満鉄総裁として演説した際、学生基督教運動の指導者として活躍していた米国人のジョン・アール・モットに出会ったことである。その後、1919（大正8）年の欧米視察の途中で後藤はモットと会い、また、モットが来日した際にも面会していたようである。日付は不明であるが、モットが来日して後藤と面会した際に青少年に対する指導が話題となり、後藤は「今日世界に於て最も大切な青少年の指導と云ふことに対し予て私の考へて居りました点と相一致する所が多くありまして其後不肖乍ら少年団のため又青年教育の為に微力を尽したいと考へて居るのであります。」と述べている<sup>8)</sup>。

後藤が少年団に関わり始めたのは、上述の通り、

1922（大正11）年であった。その約15年前の1907（明治40）年、英国で退役軍人のベーデン・パウエルがボーイスカウトの実験キャンプを行っていた。その翌年、彼はボーイスカウト運動のテキストとも言える『スカウティング・フォア・ボーイズ』を同国で発刊した。ボーイスカウト運動は瞬く間に英国に広まり、1909（明治42）年にはロンドンにボーイスカウトの本部事務局が開設された。時を同じくして、ボーイスカウト運動は欧米諸国やその植民地に伝播した。日本にもその活動が視察や調査などによって少しずつ報告され、また『スカウティング・フォア・ボーイズ』が翻訳されて伝わり、大正時代に入って各地で少年団として組織化された。

後藤の欧米視察は1919（大正8）年であり、モットと面会した米国、そして英国、フランス、ベルギー、オランダを訪問する間に、各地のボーイスカウトを見る機会があったと考えられる。その中で、後藤はボーイスカウト発祥の地である英国において、その活動を参観した様子を次のように述べている<sup>9)</sup>。

私としては一昨々年外遊中倫敦に於て同地のボーイ、スカウトの集合を参観し、其際英国の少年団が如何にもよく訓練され、身体的にも精神的にも立派な態度を示したのを見、又その訓練が単に隊伍を組んで運動競技をやることを目的とせず、更に深く精神的に人格的に少年の心身を誘導陶冶せんとするにあるを見、又それが単なる個人的訓練にあらずして、将来社会生活に於ける一単位として之に適応する様その心身を鍛練せんとするのを見、更にその訓練の方法たるや少年団員互或は師となり弟子となり、或は兄となり弟となり、或は朋友となりて相扶け相励まし、而も秩序整然として、その修養の実をあげてゐるのを見て非常に愉快に感じたのである。

少年に対する精神的かつ人格的な指導、社会に適応するための訓練、さらに少年相互の人間関係に、後藤が興味を示していたことが窺える。別稿で後藤は、この英国訪問時、ロンドンのハイドパークに集まった英国のボーイスカウトが「整然と」しており、「其の訓練、其の意気ところか、其の気合いの具合」に感激したと述べている。それが契機となり、「之（少年団—引用者）に対して多少の知識を得たいものだと考へて、種々の人に頼んで材料を集め研究を心懸けて見た」という<sup>10)</sup>。

## 4. 後藤の少年団における役職就任

欧米諸国やその植民地におけるボーイスカウトの結成

が相次ぐ中、日本でも全国各地で少年団が結成され、また、東京と静岡で少年団の連合体が組織された<sup>11)</sup>。そこで1922（大正11）年4月13日から2日間、全国の少年団の代表123名が静岡に集まって「全国少年団大会」を開催し、少年団日本連盟の組織化と規約を承認した。ここで、連盟の総裁には皇族を戴き、副総裁には後藤新平（東京市長）、理事長には二荒芳徳（宮内書記官）にそれぞれ就任を依頼することとして、その任に高島平三郎（心理学研究、児童学研究の草分け）、三島通陽（草創期の少年団の設立者）、小柴博（東京連合少年団理事長）が当たることになった。この「全国少年団大会」に続いて、4月15日から17日まで、東京に全国の少年団員が集まって「少年団日本ジャンボリー」が開催され、訪日していた英国皇太子の「奉迎式」や、「大運動会」が行われた<sup>12)</sup>。

これら1922（大正11）年4月の少年団の動きにおいて、後藤は3つの役職を引き受けた。第1に、少年団日本ジャンボリー（以下、「ジャンボリー」と表記）の総裁であり、第2に、少年団日本ジャンボリーを開催する中心組織であった東京連合少年団（1914年結成）の団長であり、第3に、少年団日本連盟の総裁（1924年からは総長）である。これらの役職への就任依頼について、後藤はどのように受け止めていたのだろうか。まず、第1のジャンボリー総裁について、後藤はその就任を躊躇していたとジャンボリー直後に述べている<sup>13)</sup>。

今回英国皇太子殿下の御来邦に際し、東京連合少年団の篤志の人達が相寄り、自分にも出席を求められ、少年団日本ジャンボリーを挙行することを謀られたのであるが、自分は之に対し進んで事をしようといふ考はなかつた、唯篤志の人達の企てを援けて、その目的を遂げしめようと思つたのみであつた。当時三島子爵（三島通陽一引用者）からもジャンボリーのために努力するように要求されたのであるが、自分は自分としての考から断つて置いたのであつた。それは今回のジャンボリーが成立するかどうか、また好結果を収め得るかどうか——もし好結果を得なかつた場合には、少年団の将来のため非常な障碍となるのを憂へて躊躇してゐたのである。而しその相談会に出席して見ると列席の諸君が各熱誠を披瀝して、この度の企てを成功せしむべく十分の計画を立て努力を尽してゐるのを見、而してこの際兎に角臨時総裁となつて呉れるようにとの希望であつたので、私も敢て之を承諾し、進んで援助をするようになったのである。

このジャンボリーは、東京における少年団の横断的組織である東京連合少年団が音頭を取っていた。後藤がジャ

ンボリーの準備会に出席した経緯は不明だが、後藤は当初、この計画が成功しなかった場合は少年団の将来の発展に影響が出るのではないかと考えていた。しかし、関係者の熱意に接して「臨時」の総裁職を引き受けた。後藤は躊躇の理由を、次のようにも述べている<sup>14)</sup>。

我が国の少年団を見るにその組織が未だ整はずその内容に就ても十分の研究を積んでゐないためか、そのなすところ多くは形式的で、小学校体操若くは郊外運動、又は遊戯を行ふ位で、甚だ不備な点が多い、と自分は思ふてゐた。

後藤は英国で視察したボーイスカウトと日本の少年団を比較して、少年団の未熟さを感じたのであろう。

ところが、総裁を引き受けた後藤は、現役の東京市長として英国の皇太子を受け入れる仕事があるにもかかわらず、あるいは、その仕事があるためか、少年団日本ジャンボリーの準備にあたって積極的に発言し、行動した。ジャンボリーの準備の会議に出席した後藤について、関係者は、「後藤総裁からは、実にかゆい所へ手が届く様な注意を与へられ財源も御心配下さるといふ断乎たる御決心を示された。」と記録している<sup>15)</sup>。参加した「団員より非常なる喜びを以て迎へられ感謝された参加記念メダル」や、「団旗参加章」を提案したことも、後藤による具体的な指示の一例である<sup>16)</sup>。

少年団関係者はジャンボリーの財源を心配したが、後藤は『『金のことなら全然心配するな』と、全部引き受け、「有力者を動かし、多額の金品が集まり来つた。さうして大会の経費を支払つた後、なほ八千余円を剰した」ので、全て東京連合少年団に提供したという<sup>17)</sup>。

このような準備を経て開催されたジャンボリーを見て、後藤は次のように述べている<sup>18)</sup>。

意外にもジャンボリーは自分の曩きの杞憂を裏切り、非常な好結果を得、殊に地方少年団の熱心な努力は——自分は地方少年団が東京の少年団よりも余程優秀のように思ふた——少年団なるものゝ必要を一般に了解せしめ、全国に之が普及を計るの好機会を作ることが出来たのである。

このように後藤は、少年団に積極的な意義を感じた。ただ、あくまで臨時のジャンボリーの総裁を引き受けた後藤は、永続的な東京連合少年団の団長や、少年団日本連盟の総裁に相応しい人物として、「有徳の人」あるいは「文部省と余程多大な力」を持つ人でないと、「少年団の訓育の方法を完了することはできない」と考えていた。後藤はこれらのことを「自分の厭ふ所でないけれど

も、是れ一つが自分の主眼でもなし又相当な人が他あるであらう」と、就任をためらっていた<sup>19)</sup>。

その一方で、当時、日本の内外を巡る様々な政治情勢について後藤は「国難来」と表現し、その対応には「自治」の精神が必要であることを説いていた<sup>20)</sup>。その具体的な方法として後藤は、「国難の来るのを救ふるは少年ある、少年感化の力を以て之当たる必要がある」と考えるようになっていた<sup>21)</sup>。このことが、団長や総裁就任の背景にあった。

東京連合少年団の団長については、ジャンボリーの期間中、後藤に就任の打診があった<sup>22)</sup>。また、少年団日本連盟については、前述の通り、少年団日本ジャンボリーの直前に静岡で開催された全国少年団大会において、総裁に皇族、副総裁には後藤の就任を依頼することになっていたが、皇族を「責任ある地位に推戴することは恐れ多い」との理由から、後藤に総裁を依頼することになった<sup>23)</sup>。このように、後藤の少年団の活動に対する肯定的、かつ積極的な考えと、少年団関係者による少年団員に対する「熱烈な誠意と献身的な努力」を見た経験<sup>24)</sup>、そして少年団の団長や総裁への就任依頼が重なり、後藤の受諾の気持ちは固まっていった<sup>25)</sup>。

さて、なぜ、少年団の関係者は後藤に総裁や団長などの役職の就任を依頼したのであろうか。このことを考える手がかりは、1923（大正12）年に後藤が東京市長を辞職するにあたって、後任の市長である中村是公に東京聯合少年団の団長を譲ることを、後藤自身が提案したが、それに対する同団理事長の小柴博の意見に求めることができる<sup>26)</sup>。

東京聯合少年団長は東京市長なるが故に後藤先生に就任をお願いしたのではない。後藤先生個人の人格を尊敬して先生個人にお願いしたのだから、永久に団長として御尽力願ひ度い

小柴としては、東京聯合少年団の団長を後藤に依頼したのは、東京市長だからという理由ではなかった。後藤の「人格」に加えて、後藤の青少年教育に対する考え、あるいは英国のボーイスカウトを視察したという経験を踏まえてのことであると考えられる。この小柴による発言の結果、後藤は東京市長を辞職後も団長であり続けた。この間、1923（大正12）年9月から12月まで、第2次山本権兵衛内閣で内務大臣を務めている。その後、1925（大正14）年に小柴が他界すると、中村市長が団長になり、後藤は名誉団長となった。その一方で、後藤は少年団日本連盟の総長（1924年に総裁から変更）を引き続き務め、全国の少年団の活動を視察するなど精力的に関わっていた。

## 5. 後藤の子ども観

これまで、後藤の少年団教育論を検討してきたが、実際に後藤は、少年団員である子どもたちとどのように接していたのだろうか。また、少年団員と自らとの関係を、どのように感じていたのだろうか。

後藤は、少年団員とかかわる際、少年団員の指導者というよりも仲間であるという気持ちを持っていた。彼は次のように述べている<sup>27)</sup>。

自分は今年、齢既に七十三才に達した。だから少年達を見ると、丁度孫と祖父との関係に近きものである、その自分が孫に齊しい少年の間に交つて、少年団の運動に参加してゐるのは、或る人の勝手につたへる如く、自分は決して、子供にあやかりたい、といふ単純な気持ちからではない。只自分が真に少年の様な気分になつて、之らの少年共を正当の道へ導きたいからである。然し乍ら少年達を導かうといふ考へを明確に自覚してゐては決して、少年を導きうるものではない。

少年を指導して行く為には、真に少年の気分になつて、自分と少年とを同じ雰囲気の中におかねばならぬ、その為には『俺はこの少年たちを導いて行くのだ』といふ考へがあつては、決して、その少年を満足に指導して行くことは出来ない。自分は、むしろ、その純真なる少年に教へられるために、少年達とくらしてゐる。

このような後藤の姿を、少年団の指導者はしっかり見ていた。ある指導者は、後藤の次の発言を記録していた<sup>28)</sup>。

子供を導くには子供を教へる心持ではいけない。子供に教へられる心持でなければならぬ。指導者が子供にならぬと真の指導が出来るものではない。指導者の心に子供を引きつけやうとしてはいけないと思ふ、私は元来医者なので鉄道などの研究も経験もないが併し満鉄総裁として可なりの仕事が出来た心算である。之は私は従業者になつて考てやつたからだ会社でも社長や取締役が願で人を使ふ心だと統制が出来るものではない。下僚と同じ心になつて始めて成績を挙げる事が出来るものと思ふ、自分は教育の事など知らないが、併し子供を導くには之と同じく子供の心にならねば出来るものではないと思ふ。

満鉄総裁として、現場の職員と同じ立場に立って物事を考えていた後藤は、少年団の教育においても、子どもの

心を持ち、子どもに教えられるような姿勢が必要だと説いている。だからこそ、「後藤先生は出来るだけ優しい言葉をもつてはつきりと意味の分るやうに御話なさいました。今朝拝聴しま……と申されて、すぐ今朝お聞きしてと言ひ換えられ、その一つの言葉にまで注意して幼年健児にでもよく分るやうにお話下さいました。」というエピソードが残っている<sup>29)</sup>。

後藤の少年団員に対する態度は、次の少年団関係者による回想からも読み取れる<sup>30)</sup>。

或時は少年の服を着け少年と伍し、少年と談り、少年と「テント」内に臥し、少年の作りし料理を食べ、滋味多き料理屋の運ぶ佳肴を避けて樂を少年と共にされた、従て「どんなに」忙しき時でも、ドンナに深夜でも少年の為に捧ぐる人の為めとあれば、揮毫は勿より、大抵の義務は尽された。

このように後藤は、少年達と少年団の活動を正に実践していた。名誉職としての少年団日本連盟総長ではなく、実際に子どもたちと関わりを持つ総長としての後藤の姿である。文末で「揮毫」とあるのは、「自治の三訣」の揮毫であり、今でも全国各地に残っている。

後藤が少年団の制服を好んで着用していたことも、少年団関係者が以下の通り記録している<sup>31)</sup>。

故後藤新平伯が別府で講演された際は、少年団の団服で毛脛を出して駄頭へ現れたものである。(中略)△の帽子で半ズボン姿勇ましく現れた時は、思はずこちらが赤くなつた程であつた。だが、私は、身を以て健児の範となられた総長の偉大さを見て、頭の垂れる思ひがあつた。総長は、少年団や青年団の集りの時は朝でも夜でも出られて青少年と接し共に語られる人であつた。

制帽やネッカチーフ(スカーフ)を含む少年団の制服は独特であり、後藤は少年団関係者と会う際には、律儀にもその制服に着替えていたという<sup>32)</sup>。政府の要職を経験して爵位を持つ老人が、このような姿で人前に現れることに、周囲の人達が違和感を感じていたことは想像に難くない。それどころか後藤は、「何か総長(後藤のこと一引用者)が行動を起さうとする時には、大抵少年団の名に於て事をされた」という。それは例えば、1927(昭和2)年から翌年にかけてのロシア訪問の行路において次のようなエピソードがあつた<sup>33)</sup>。

朝鮮、奉天、長春、哈爾濱、到る処旅程の大部分は(少年団の一引用者)団服で押通された。沿道各地で

在留同胞の子弟や学生などが駄頭に歓迎に出ると、必ず車外へ下りて、ニコくと白いお髭に三指の礼で答へられて、僅か三分か五分の間にも、少年の心得や人のお世話をするやう国民の覚悟を説かるゝのであつた。

このロシア訪問は対中国のための日ソ連携、日本人の沿海州への拓殖、日ソ漁業協約の成立など政治的な課題を抱えていたが、その道中で後藤は少年団の制服を着用して、各地の少年団員と積極的に関わりを持っていた。

## おわりに

本稿では、後藤新平が少年団の活動に関わりを持ち始めた経緯を解明した。加えて、後藤新平が少年団日本連盟総裁(総長)として、形式的なあるいは名誉職的な位置づけではなく、実質的な関わりを持とうと積極的に行動していたことも明らかにした。

当初、後藤は少年団に関わることをためらっていた。その根底には、後藤自身が観察したボーイスカウトの本場英国での活動状況と、日本の少年団の活動レベルの差に対する不信感があつた。それを覆したのが、少年団日本ジャンボリーにおける少年団員の活躍であつた。一旦、少年団への関わりを始めた後藤は、積極的に少年団運動の理論や実際に関する知識を獲得していった。さらには、少年団運動を普及させるべく、全国を行脚して講演活動を行っていた。後藤はボーイスカウトに由来する少年団活動の特徴を説き、学校外における教育活動としての必要性をアピールすることに全力を尽くしていた。

本稿においては、先行する中島の研究成果を意識しながら論を進めた。その結果、後藤は自ら「権力の論理」をもって少年団に働きかけたとは言いがたく、依頼に応じる形で関わりはじめ、子どもたちに対して、子どもの目線で接していたことが明らかになった。

本稿を踏まえて、今後、後藤が少年団に関わり始めた頃にもっていた少年団に対する理解、あるいは後藤が考える少年団教育の意義や「自治」との関係、そして少年団における教育論の成人教育への応用について検討を深めたい。

本研究は、公益財団法人上廣倫理財団の平成25年度研究助成を受けたものである。

## 注

- 1) 上平泰博・田中治彦・中島純『少年団の歴史』(萌文社、1996年)、田中治彦『少年団運動の成立と展開』(九州大学

- 出版会、1999年) などによる。
- 2) 中島純「少年団日本連盟と『健児教育』 —1920年代における実態と動向」東京学芸大学教育学教室『教育学研究年報』第9号、1990年、15-31頁。中島純「大正デモクラシー期後藤新平の社会教育思想」『日本社会教育学会紀要』27号、1991年、47-55頁。
  - 3) 後藤の少年団の関わりについて事実を確認するのみであることは、以下の文献でも同じ。吉田裕香「ボーイスカウト」渡辺利夫・奥田進一編『後藤新平の発想力』成文堂、2011年、80-81頁。中島純「後藤新平とボーイスカウト」御厨貴編『時代の先覚者 後藤新平 1857-1929』、藤原書店、2004年、202-204頁。春山明哲「『そなへよつねに』」藤原書店編集部『時代が求める後藤新平』、藤原書店、2014年、269-271頁。
  - 4) 増田寛也「『自治三訣』の現代的展開」『環』32号、藤原書店、196頁。
  - 5) 伊藤正次「社会教育事業」『都市問題』98巻5号(後藤新平生誕百五十年記念八月号特別増刊『後藤新平・大風呂敷の実相』)、2007年、35頁。
  - 6) 後藤の経歴は、御厨編『時代の先覚者 後藤新平 1857-1929』(前出)や御厨編『後藤新平大全』(前出)など、後藤新平に関する先行研究に基づいている。
  - 7) スカウト運動史編さん特別委員会編『日本ボーイスカウト運動史』(ボーイスカウト日本連盟、1973年)や、ボーイスカウト東京連盟運動史編集特別委員会編『日本ボーイスカウト東京連盟運動史』(日本ボーイスカウト東京連盟、1988年)による。
  - 8) 後藤新平文書22(在野時代)、67(モット博士関係 青少年の指導と社会教育)。この文書の執筆年月日は不明。この文書には、後藤が「先年米国に漫遊」したこと、文章執筆の3年前にモットが5回目の来日を果たし、会談したことが記されている。なお、ジョン・ローリー・モット(John Raleigh Mott, 1865-1955)は、YMCA 指導者。1946年にノーベル平和賞を受賞。10度、来日した。
  - 9) 後藤新平「ジャムボリー所感」『社会と教化』2巻7号、1922年7月、2頁。
  - 10) 後藤新平文書21(少年団関係)、10(伯の講演原稿及速記)、4(芝中学校に於ける講演速記)、5-7頁。
  - 11) 1914(大正3)年設立の「東京連合少年団」、1921(大正10)年設立の「少年団静岡県連盟」など。
  - 12) 少年団の設立過程は、上平ら『少年団の歴史』(前出)や、田中『少年団運動の成立と展開』(前出)などを参照。
  - 13) 後藤「ジャムボリー所感」(前出)、3頁。
  - 14) 同上、2頁。
  - 15) 川本生「少年団日本ジャムボリー記」『社会と教化』2巻6号、1922年6月、46頁。
  - 16) 川本宇之介「ジャムボリーに参して」東京連合少年団『少年団日本ジャムボリー』1922年、31頁。
  - 17) 鶴見祐輔『後藤新平』第4巻、後藤新平伯伝記編集会、1938年、813頁。星一(星製菓)が1,730.80円、岩崎小彌太(三菱財閥)、山下亀三郎(山下財閥)、浅野總一郎(浅野財閥)、川崎八右衛門(川崎財閥)、渡辺勝三郎(内務省官僚、当時は横浜市長)、いずれも実業家の神戸擧一、成瀬正行、望月軍四郎、小野金六らが1,000円を寄附するなど、総額17,730.80円が集まった(「御寄贈金並御芳名」東京連合少年団『少年団日本ジャムボリー』(前出)、145頁)。
  - 18) 後藤「ジャムボリー所感」(前出)、3頁。
  - 19) 後藤新平文書21(少年団関係)、10(伯の講演原稿及速記)、8(大分県に於ける講演速記)。
  - 20) 後藤は『国難来』(内観社、1924年)を出版して、第1次世界大戦後の国際政治、清浦奎吾内閣発足前後の国内政治の混乱を論じた。既に後藤は、『自治生活の新精神』(新時代社、1919年)を出版するなど、「自治」に関する論考を数多く出版していた。
  - 21) 後藤新平文書21、10、8(前出)
  - 22) 鶴見『後藤新平』第4巻(前出)、814-815頁。
  - 23) スカウト運動史編さん特別委員会編『日本ボーイスカウト運動史』(前出)、71頁。他にも、「後藤総長が少年団に関係された経歴」(『少年団研究』6巻5号、1929年5月、15頁)や、田中治彦『少年団運動の成立と展開』(前出)、178、185頁)を参照。
  - 24) 後藤新平文書24(自筆原稿類)、13(講演、挨拶、祝辞、訓示)、35(講演 少年団に対する吹込原稿)、5頁。
  - 25) 1922(大正11)年の時点で後藤は東京市長を務めており、その立場上、そしてそれまでの経歴上、後藤には多くの団体から役職就任の依頼が相次いでいた。例えば、1920(大正9)年の市長就任以降に限ってみても、1922(大正11)年に民力涵養協会会長、1923(大正12)年に日本性病予防協会総裁、1924(大正13)年に家庭電気普及会会長と社団法人東京放送局初代総裁、1926(大正15)年に日独協会会頭、1927(昭和2)年に日独文化協会会長といった役職を引き受けている(御厨編『後藤新平大全』(前出))。
- 東京市の助役として後藤を支えていた永田秀次郎は、後藤が東京連合少年団の団長を引き受けた際のエピソードを、次のように紹介している(永田秀次郎「後藤伯爵」東京連合少年団『ジャムボリー』8巻5号、1929年5月、8頁)。
- 私はいつも後藤さんに  
「あまり会長が多いから会長の整理をしたら」と申してをりましたので、団長になる時に私は御相談がありました。後藤さんは自分から好きさうで  
「此の団長にはおれでなければ一寸他にやる人もあるまい」と言はれ、私はよく考へました。如何にも団長としては、あんな年老つた方で、子供らしい人はないとおもひ私は  
「市長さん、少年団長だけはよろしいでせう」

と申し上げた。

永田は別の記事でも、後藤の対応を具体的に記している（永田秀次郎「後藤伯と少年団」『少年団研究』6巻5号、1929年5月、18頁）。

此少年団の団長を頼まれました時は後藤さんは余程困つて居られて「君！少年団長だけは何とかしてやらねばならぬかネー」と云つて丸で私に訴へるが如くに申されました、私も初めは中々容易に御同意は致しませぬでしたが、考へて見ますと成程皆さんの様な少年の友達となつてお骨折りになると云ふには後藤さん程に適当な人は先づ見当らない、又御本人も余程それが御希望の様で如何にも少年団長に自ら進んで成りたい様な御様子であつたので、遂には私も「あなたがそれ程に思つて居らるゝならば是ばかりは団長になられても止むを得ますまい」と申上げ、後藤さんは非常な上機嫌で御引受けになつたのであります。

- 26) 「少年団十五年を語る」東京聯合少年団『ジャンボリー』15巻12号、1936年12月、35-36頁。
- 27) 後藤新平「青少年の訓育に就て」『家の光』5巻1号、1929年1月、10-11頁。
- 28) 堀田信直「『僕等の好きな総長』の歌は終りを告げた」東京聯合少年団『ジャンボリー』8巻5号、1929年5月、20頁。
- 29) 三島通陽「将来の日本をたのむぞ！」東京聯合少年団『ジャンボリー』11巻10号、1932年8月、5頁。
- 30) 原道太「後藤総長と犠牲精神」東京聯合少年団『ジャンボリー』8巻5号、1929年5月、14頁。
- 31) 大迫元繁「団服の故後藤総長」『少年団研究』11巻5号、1934年5月、17-18頁。後藤の制服や、制服に着用する徽章についての思い入れは、鉄道員総裁時代に遡るようである（鶴見祐輔『後藤新平』第3巻、後藤新平伯伝記編纂会、1937年、158-166頁）。
- 32) 「少年団が団服で総長を迎へ居ると聞かれば、夜の夜半でも、必ず、団服姿で、汽車旅行中は、態々汽車を降りて之に接せられた」（原道太「弱者の味方としての後藤総長」『少年団研究』6巻5号、1929年5月、34-35頁）。
- 33) 深尾韶「少年団で切り取り」『僕等の総長後藤新平先生』1936年、21-23頁。